

焦げついた夏

祈り

朗読
村尾靖子

太平洋戦争も終わりに近い昭和十九年五月、
私は、宇部市で生まれた。

父母が結婚して十三年目に姉が誕生し、続いて
十五年目に私が誕生した。



私が満一歳の誕生日を迎えた年の七月、
工業都市だった宇部市は、B29による空襲を
受けた。

母は三歳だった姉の手をひき、私を背中に
くくりつけて戦火を逃れ、郊外の田んぼ沿い
の畦道^{あぜみち}をひたすら走りつづけたそうだ。



地獄絵のような光景を夢に見ては語り続け
ていた母を通して、私は戦争を知った。

姉を体の下へ入れ、私をおんぶした母は、畑
の畦あぜの陰に身を隠して、ちようど外敵から

ひな鳥を守る親鳥のように、焼夷弾の火の海
から私と姉とを守っていたらしい。

「なぜ、あ那时候、あなたをおなかの下へ入れておかなかったのか……」

母は、この一事のために一生後悔しながら生きてきた。



父の弟が、母と私の上で燃えさかっている
ふとんに気づいたときはもう手遅れであった。

「ほんの一瞬、見つけるのが遅かったら、

お前さんの命はなかったぞ！」

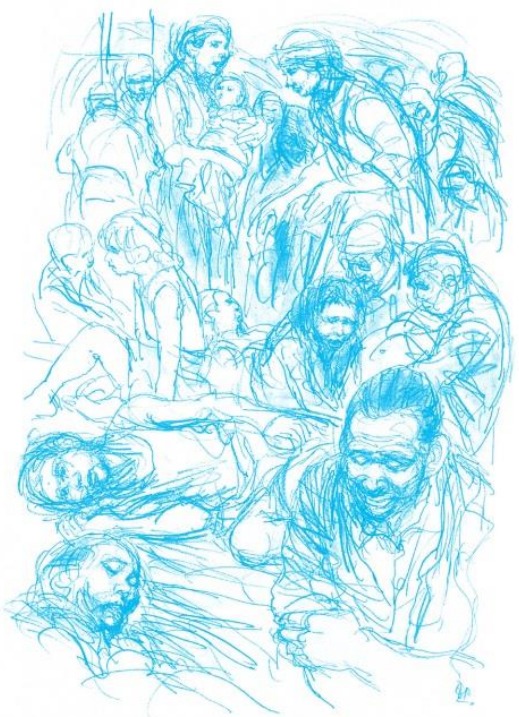
叔父が、口ぐせのように言っているせりふである。

母の背中にくくりつけられていた私は、

大あわてで下ろされたが、その母の手に皮膚
がベッタリとくっつくほどの大やけどであった。

母の気の狂ったようなさまを、私は何度も

話に聞かされた。



「泣き疲れて何日も眠り続けるあなたを見て
思わず祈ったのよ。

“神さま、これは、女の子なのですよ。”

こんなひどい体で一生生きて行くなんて、あまり
にもかわいそうです。

どうか一刻も早く、天国にお召し下さい”って、

こんなことを祈るなんて……。まちがっているわね」
いつまでも燻り続ける煙を間近に感じながら

母は、どれほど後悔したことであろうか。

私達が空襲にあつて一か月の後には、日本は
終戦を迎えた。

私達が草深い里へおちつき、生活を始めて

まもなく、姉は重い病気にかかり、

戦後の薬も十分でない時代で、手当てのかいも
なく短い一生を終えた。

B 29におびえて「母さん飛行機がこわい！」と
言いながら。



姉の死によって、母の後悔は一生消える
ことなくつきまとうこととなった。

「ほんの一瞬だったのよ。一瞬の後には、神さま、
この子を助けてくださって祈ったのに……

罰が当たったのよね」

母は、ひどい火傷を負った私を見て思わず祈った
ことばと引き換えに、姉が天国に召されたと思い
つづけることによって自分を責めているのだった。

姉が死んで三十年たつても、母は娘を天国に
迎えてくださいと祈った一瞬を思い後悔
しつづけた。

そんな母の気持ちを知らず、

私は辛いことがあるたびに、

母に八ツ当たりしながら生きてきた。



何年か前の夏、雑誌の取材で婦人誌の記者や
カメラマンと広島を訪れた。

そのとき出会ったのが、Kさんという女性だった。

透き通ったような肌をした、今にも消えてし

まいそんな感じのする美しい人だった。

昭和二十年の生まれで、生まれてすぐに

原爆に遭い、白血病の不安と闘いながら

生きておられる方だった。

ゆかた姿のよく似合うKさんと肩を並べて歩
きながら、足は自然に平和公園の方に
向かっていた。

二人に言葉はいらなかった。

もう戦後六十年以上になる。戦争を知らない
世代の方が、きっと多いだろう。

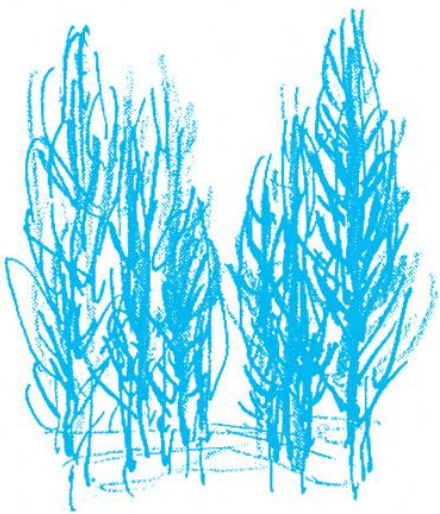
しかし、私もKさんも、自分では記憶にない
戦争を決して忘れることはできないのだ。

広島市の平和公園の夏の夜は満天の星空であった。
慰霊碑の前の線香から絶え間なく煙がのぼった。
私もKさんも口にこそ出さなかったけれど、きつ
と同じことを祈っていたような気がする。

ひざを折り、じつとうずくまるように座った
私達の目に慰霊碑の前の線香の煙を通して、
うす明かりの中での原爆ドームが
遠くゆがんで見えた。



星空を見上げるたびに、いつまで経っても
気持ちのうえで、終戦を迎えられない
私の母の悲しみと、Kさんの哀しい姿を
いつも思い浮かべるのである。



挿絵：高田勲 画
命をみつめてより

焦げついた夏

祈り

朗読
村尾靖子